

二〇二三年五月二〇日

明易しゴルフコンペの山泊り
部屋の蛾を月の夜空へ放ちけり
大幹の樟若葉より鳥語降る
夜市の灯消えていよいよ星月夜
草刈機エンジン止めて道案内
離陸機の爆音を聞く木下闇
髪乾くまでを端居の旅ごころ
負けた子が隠す涙の跡涼し
薫風に賛美すミサの主の祈り

宏 虎
たかを
満 天
素 秀
みきお
もとこ
ひのと
ひのと
む べ

二〇二三年五月一九日

夕焼に遠き戦火を思ひけり
飲み干せばくわらんと鳴りしラムネ玉
盛り上がる丘は古墳や青葉闇
くちなはを避けてよろめく猫車
藻の花の流れに沿ひぬ堰の門
治癒の身に存問のごと庭の蝶
こぼれたる子燕を巢へ戻しけり

ひのと
凡 士
なおこ
ひのと
素 秀
そうけい
千 鶴

二〇二三年五月一八日

薫風に窓全開の歯科医院
ポランティア総出の田植ゑ千枚田

満 天
凡 士

風涼し手作りといふ藍暖簾
若葉風巫女の導く綿帽子
御神水注ぎ御田植始まりぬ
納屋の扉を開けるや否やつばくらめ
香にめぐる四通八達薔薇の径
大胆な径路図と見し蜷の道
畑の蓼ごめんごめんと抜きにけり
爺の網ひとふりで蝶捕えけり

みきえ
豊 実
うつぎ
せつ子
明日香
うつぎ
千 鶴
かえる

二〇二三年五月一七日

五月晴ブルーベリーの結実す
宙の虻花粉まみれの足見せて
野苺に素通り出来ぬ山育ち
揺れやまぬ磯の小舟の影涼し
な咎めそ御田に太き蜷の道
花あふち天蓋なせる古墳かな
風の声水の声聴く座禅草
湧水に胡瓜のをどる古道かな
蛙啼き止みて御田に笙ひびく
投網打つ背中に落つる夕日かな
揺るる露コロボックルに似たりけり
召天日なる朝卓に薔薇手向く

董 雨
素 秀
うつぎ
千 鶴
うつぎ
こすもす
宏 虎
凡 士
よう子
みきお
素 秀
む べ

二〇二二年五月一六日

だれよりも先づ婿殿へ新茶汲む
逆潮に渦巻く卯波大鳴門
大芍薬一夜の雨に散華しぬ
風抜ける味噌蔵長き麻のれん
柿若葉艶増し油絵のごとし
つばくらの出入口ある厩舎かな
チャペルへと杖つく坂に風薫る
御田植や丹波の郷の一之宮
神事待つ御田を囃す蛙かな
散り敷いてなほ咲き継げるえこの花
鯉あまた群るる水面に緑さす

ひのと
宏 虎
千 鶴
智恵子
素 秀
澄 子
あひる
うつき
うつき
豊 実
きよえ

駿河より一筆添えて新茶来る
釣船の浮沈して見ゆ卯波かな
早乙女の真白き脚の脚絆かな

もとこ
素 秀
うつき

二〇二二年五月一四日

燕の巣峡の駅舎の四隅占む
嘶家の落ちの間合ひや夏羽織
梅酒瓶ことりと響く夜のしじま
戸締りについて来る子や星涼し
薔薇屋敷あるじ自慢のアーチかな
巻舒しつ山巒昇る夏の霧
万緑へ一直線やハイウェイ

うつき
千 鶴
む べ
ひのと
もとこ
明日香
みきえ

二〇二二年五月一五日

子燕の巣立ちの朝の駅舎かな
豆飯の炊けて香のたつ夕餉かな
青苔に寝転んでをる稚児地蔵
母を待つ子の眼差しや夕立中
庵涼し北山杉を籬とす
境内のベンチで句会青葉風
コンサートへと潜りゆく薔薇アーチ
早乙女の笠にのぞきし束ね髪

凡 士
満 天
智恵子
ひのと
せいじ
なおこ
こすもす
よう子

毎日句会みゆる選・二〇二二年五月二二日